

A Study on “ ta ” in Japanese ()

A Study on "ta" in Japanese(II)

日本語「た」の機能の研究(Ⅱ)

渡邊了好

文科大學日文學科

A Study on "ta" in Japanese(Ⅱ)

Akiyoshi Watanabe

Dept. of Japanese

Abstract

This article attempts to make clear the characteristic of "ta" in Japanese.

The conclusion of this article is as follows.

The characteristic of "ta" in Japanese is to represent the transitional points between the beginning and the end of a situation.

I. 概 要

本稿は、外國人に對する日本語教育の見地から、動詞を用いて出來事(動作と作用)の進み方を言い表わす方法を検討し、その体系の中での「た」の機能について論じたものである。

筆者は本稿にさき立って同様の見地より、「た」の機能について論じたことがある。¹⁾

したがって本稿はその考察の結果を基礎としているが、前稿においては、ひとつの(出來事)²⁾が複数の動詞によって表わされる場合の「た」の役割については論じることができなかった。例えば、(もえる)；「もえる」と「きえる」,(ねる)；「ねる」と「さめる」などのように動詞としては別の「出來事」としてとらえられていても實際にはひとつの(出來事)である場合の表現についてである。

これらの(出來事)の進み方を表わすとき「た」がどのような役割を果すかを論じるのが本稿の目的である。

(1)本稿での「出來事」とは、時間の経過にもなって展開する過程を持つものとして、言語的にとらえられているような現象のことである。

(2)「出來事の進み方を言い表わす」とは、次のような意味である。

話者がその現象の起こる現場にいられたとき、表現の對象となる(出來事)が、その(出來事)に

1) 拙稿「日本語『た』の機能」『日語日文學研究』第4輯, 1984.2. 韓國日語日文學會。

2) (出來事)は現實に起こる現象を指し、カッコのない出來事は言語的にとらえられたことがらを示す。(もえる)と、もえるのちがひも同様である。動詞でとらえられた方もえるを「もえる」とすることもある。「出來事」も同じ。

2 渡邊了好

言語的に固有の過程の中で、どの段階にあるかを示すことである。

したがって、これを言い表わす「方法」とは、上記のことがらを示すことのできる文法形式を言うことになる。

つまり、ある(出来事)が過程の中のどの段階にあるかを具体的に示せるような形式を言う、ということである。

(3)本稿の対象とする(出来事)は、動詞の分類上、「継続動詞」と「瞬間動詞」によって言語的にとらえられるような出来事である。³⁾

(4)本稿では、アスペクトという用語をあえて使用しない。アスペクトの概念の規定が必ずしも容易でないことももちろんではあるが、何よりも本稿が、「た」はテンスを示すとか、あるいは完了のアスペクトを示すとかの先入観から離れて、ある(出来事)の進み方を記述するに當って、動詞の「た形」がどのような段階で何を示すために用いられるのかを調べようとすることに目的を置いているからである。

更にもっとも重要な理由は前稿における考察の結果、外国人に対する日本語教育の見地より、(出来事)の現場にいる発話者が眼前に起る現象を描寫表現する方法を調べるという立場に立つ限り、従来アスペクトを示す形式とされるものの中に區別すべき二種の形式があることが知られたからである。つまり、(出来事)の過程のどの段階を問題にするかを示せるだけのものと、発話者が(出来事)についてその(出来事)が過程の中のどの段階にあるかを表わせる文法形式とのふたつである。前稿では前者を現實描寫力の無い文法形式、後者を現實描寫力の有る文法形式として區別した。

(5)語いの上でひとつの動詞によってとらえられているような(出来事)の表現にあつての「た」は、(4)に述べた現實描寫力を持って(出来事)が始まったこと、または終ったことを表わす機能を有するというのが前稿の結論であつた。

(6)本稿ではさきにあげた(もえる)；「もえる」と「きえる」、(ねる)；た(もえる)；「ねる」と「さめる」等の(出来事)の進み方の表現について、上の(1)(2)(3)(4)(5)の見地より分析検討した。その結果、「た」は複数の動詞によって表わされる(出来事)の表現においても、始めと終りを現實描寫力を持って表現し、更に進行中の(出来事)にある變化が起つたときそのことを現實描寫力を持って表現できることが明らかになつた。

(7)複数の動詞(本稿ではふたつの動詞)によって表わされる(出来事)の表現を分析、検討する過程で、「うごき動詞」と名付くべき一連の動詞を見出した。これは動詞「うごく」に代表される如く、(出来事)の終りの段階の表現に動詞「とまる」をとる動詞のことであり、動詞分類上、興味深いことであると言える。

Ⅱ. 方 法

ここで研究の方法について述べておく必要がある。

(I)本稿は何よりも意味より形式に到らんとする研究である。

假に本稿である動詞があつかわれたとしてもそれは動詞についての研究ではない。ある(出来事)の表現についての研究の過程で結果として動詞にふれることとなるのである。⁴⁾

言いかえれば、特定の形式を定めておいてその意味を分析し解明するのではなく、現實の(出来事)

3)ここでは金田一春彦氏(1950)以来の傳統的分類に従う。

4)「うごき動詞」についての言及も同様。

を動詞を用いて表わす場合を想定し、(出来事)の進み方をどのような文法形式によって表わすかを調べようとしたのである。この方法では(出来事)の表現にあたって(出来事)の進み方の中で重要な部分をあらかじめ想定しておく必要がある。例えば(出来事)の始まりの部分とか、進行中とか終りの部分とかいうように、(出来事)の進み方の中で重要なところをみきわめて(出来事)の過程を構成しておく必要があるのである。

前稿では次の三つの部分を想定して(出来事)の過程を構成した。

- a. ある(出来事)が始まった瞬間
- b. aの瞬間以降の進行中の期間
- c. (出来事)の終わった瞬間

そして更にこれらを次のように圖式的形で提示した。

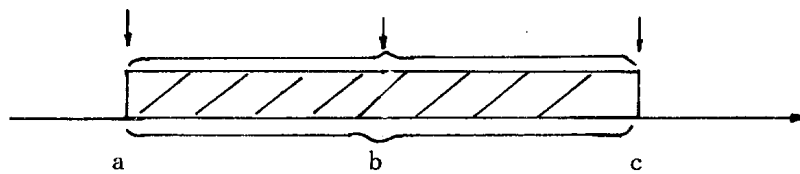


圖 1. (出来事)の展開過程

言うまでもなく、水平の矢印の方向は時間の流れる方向を示している。a, b, cは上にのべたそれぞれの瞬間と期間を指す。垂直の矢印の上には、(出来事)がa, b, cの段階にあることを示す文法形式が書きこまれることになる。

「作る」という動詞に例をとって完成した圖式を示せば次のようになる。

ツクリハジメタ ツクツテイル ツクリオエタ

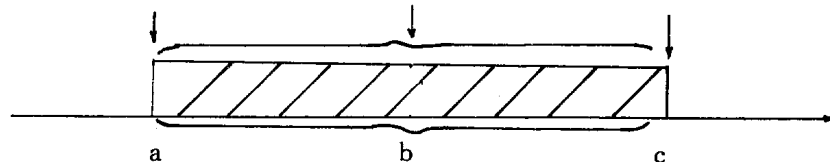


圖 2. (つくる)の過程とその表現

上のカタカナ表記による形式は全て、(出来事)の現場にいあわせた発話者が目前に起る現象を描寫表現するときに使えらる現実描寫力を備えた形式である。

次にこのように進んで行く(出来事)を描寫する方法を圖式によって示すことにした理由について説明しておく。

圖式による形式の提示には厳密とは言えない面があることは確かであるが、本稿の目的はある動詞の意味について、日本語を母語とする人々と共通の理解や前提を持つとは限らない人々に、その動詞を用いて現実に起った(出来事)の記述、表現に関するある程度客観的な基準を提供しようとする点にあるのであえて圖式による提示の方法を選ぶこととなったのである。

上のa, b, cの表示はまさにこの異なる母語を有する人々に共通の基準として想定されているのである。この圖式のa, b, cは言語を離れた現実の(出来事)の中に想定した基準である。

4 渡邊了好

これに對して言語的にとらえられた「出來事」というものは各言語によってさまざまである。つまり、ふたつの言語の語いの中から辭書的に似ていると思われる動詞をとりあげても時間に関する問題が関わると言語ごとに（出來事）のとらえ方に相當の違いがあるのが普通だということである。日本語と韓國語の「けっこんする」と「결혼하다」の例をあげてみよう。

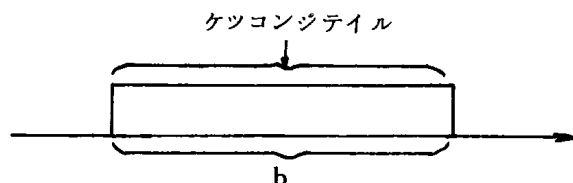


圖 3. (日) 「ケツコンジテイル」の適用範圍

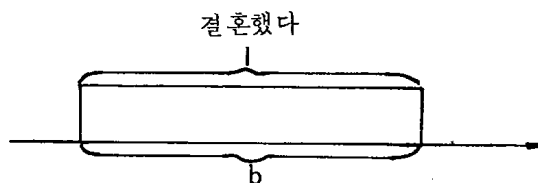


圖 4. (韓) 「결혼했다」の適用範圍

日本語、韓國語の圖式で b の期間は結婚した状態が繼續している期間である。

つまり誰かが結婚した状態にあることを日本語では「結婚している」と言い、韓國語では「결혼했다」という表現で示すということである。したがって、相手に既婚であるかどうかを尋ねるとき、日本語では「結婚していますか」ときき、韓國語では「결혼했습니까」ときくことになる。

辭書的な意味に大きな違いがないとみられるのに（出來事）の進み方に関する言語的なとらえ方の上で違いがみられる例のひとつである。

しかしここで確認しておかねばならないことは、日本語を母語とする者であれ、韓國語を母語とする者であれ、表現の文法形式の違いはあっても、誰かが結婚した状態にある期間というものは一應共通のものとして考えられるという前提から本稿が出發しているということである。

言語の形式が人間の現實認識に與える影響に関する多くの議論、ひいては異なる言語を母語とする者の有する世界像が本當に共通のものでありうるか等の議論は外國語教育という見地からここでは一應たな上げすることとし、上のような共通の期間が誰にでも考えられると假定するのである。

本稿において、複数の動詞によって表わされた（出來事）の過程を構成するに際して上のような圖式を利用するものとする。

(2)本稿においては、（出來事）の進み方を表現する日本語の動詞から作られた文法形式の特徴を際立たせるために日韓兩語の間で若干の對照的方法を用いた。この對照分析にも何らかの共通の基準が必要である。日本語に関する個別的研究は日本語の基準によってなされ、韓國語に関する個別的研究は韓國語に固有の基準によってなされるというのでは對照的分析は成り立たないであろう。ところが對照分析のための客觀的基準を見出すこともそれほど容易なことではない。

本稿では比較對照のための基準としてやはり上のような圖式を利用した。

Ⅲ. 複数の動詞によって表わされている（出來事）の表現

(1)ひとつの（出來事）が言語的にもひとつの動詞によって表わされている場合。

あるひとつの(出来事)が言語的にもひとつの語によってとらえられているということはその(出来事)が言語的にもひとつの「出来事」としてとらえられているということである。前章で例にあげた「つくる」などはこの例である。(圖2参照)

前稿において考察したのはこの(1)の場合についてであった。

そして、Ⅲ章の標題であり、本稿の目標でもあるのは次の(2)の場合である。

(2)ひとつの(出来事)が複数の動詞によって表わされている場合。

これはあるひとつの(出来事)が言語的にはふたつ以上の「出来事」としてとらえられているという場合なのである。

次に例をあげることにする。

例、(もえる); 「もえる」・「きえる」

「もえる」と「きえる」は別の語であるがそれらの語が表わしている(出来事)は、実際には切れ目なく進行するひとつの(出来事)であると見ることができる。

そこでこれらひとつの(出来事)がどのようにして言語的にふたつの動詞によって表わされるかを圖式によって示してみよう。

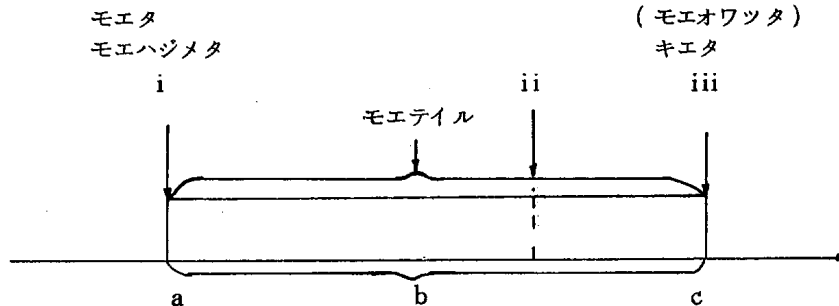


圖5.(もえる)の過程とその表現

まず圖式に則して(出来事)の説明から始めることにしよう。

この(出来事)はaの瞬間からcの瞬間までの期間、何か燃えつづけるという(出来事)である。時間の流れに沿って言えば、aの瞬間以前には燃えておらず、cの瞬間以後にも火は燃えていないのである。aからcまでのある時間のあいだ、中斷することなく(燃える)という出来事が進行するという状況を示したのがこの圖式である。

したがって(出来事)の側から見れば、aからcまで一度も中間に切れ目のない、一連の(出来事)であると言える。

しかし、これを言語的にとらえると次のようになるのである。

aの瞬間、現場にいたあわせて発話者が使用する表現形式は、「モエタ!」あるいは「モエハジメタ」等であろう。

そしてこの一連の(出来事)が終るcの瞬間、同じく現場にいたあわせて発話者が使用できる表現形式のひとつは、「モエオワツタ」である。しかし二の表現は多少不自然でありこのcの瞬間に関しては、「キエタ」という形式を用いる発話者が多いことが豫想されるのである。また、「キエタ」のもととなる動詞⁵⁾「消える」は、cの瞬間に突然、この(出来事)に適用されることも、あり得るが、それ以前に

5) 高橋太郎氏の用語。「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』, 1976, むぎ書房。

(出来事)に終りそうな徴候が現われたときから適用されはじめるのである。この「消える」が適用されはじめるときを示したのがローマ数字の ii の下の矢印である。當然のことながらこの矢印の示す點は「モエタ」, 「モエハジメタ」と「モエオワツタ」, 「キエタ」の中間にある。

つまりひとつの(出来事)が言語的にはふたつの「出来事」としてとらえられ表現されているということができるのである。

この(もえる); 「もえる」・「きえる」に関しては後にもう一度「た」の機能に言及するとき更に論ずることとする。

本稿が取りあげるのは言語的に以上のようにとらえられる(出来事)のことである。

(3)もとになる動詞とそこからつくり出されて、ある(出来事)の進み方の違いを表わす形式との関係について。

(1), (2)に述べてきたことを整理すれば次の通りである。

一般に、ある(出来事)を記述するためにはその(出来事)全体を概念としてとらえる動詞(もとになる動詞)と、さらにその動詞をもとにしてつくられる(出来事)の進み方のちがいをあらわす文法形式とが必要である。(このような、動詞とそこから作られる文法形式とを、一般には動詞とそのアスペクトを表わす文法形式と呼んでいる。)

さらに、現場にいわせた發話者が(出来事)を(出来事)として表現するには、上の動詞からつくられた文法形式を現實描寫力のある形態で使用せねばならないというのが前稿以來の主張であるが、それについてはひとまずおくこととする。

そしていま一度、もとになる動詞とそこから作り出される文法形式との関係にもどることとする。

本稿は、「つくる」(もとになる動詞)と(つくりはじめる)、「つくりおえる」等もとになる動詞から作り出される動詞を語一的に同じものとみなす立場をとる。

「もえる」と「きえる」については、もちろん語一的に同じものとみなすことはできないが同じ(出来事)のふたつの段階を表わすという點では、「つくりはじめる」と「つくりおえる」との関係と同様なのであるから、日本語教育の(出来事)の記述という見地からはひとまとめにくくって考えるべきものという立場をとるものである。

この、もとになる動詞とそこからつくりだされる形式との関係についての標準的な見解をつぎに引いておくこととする。本稿の立場はほぼこの見解に沿うものである。

以下は宮島達夫氏(1972)⁶⁾の動詞とそこから作り出される形式との関係に関する見解の概要である。氏は「ある動作・現象のすすみ方のちがいをあらわす手段」として次の三つをあげている。

a. 語形+補助動詞

「(～て)いる」, 「(～て)しまう」, 「(～つつ)ある」等、純粹にアスペクトと呼べるもの。「かいている」は「かく」のひとつの文法形式であり、「かく」と「かいている」とは、語一的にはおなじ單語に屬する。

b. 複合動詞

「かきはじめる」, 「かきつづける」, 「かききる」など。

「かく」と「かきはじめる」とは、べつの動作だ、ともいえるが、後要素が形式化しているから、「かきはじめる」を「かく」のひとつの變種とみることもできる。

6) 『動詞の意味・用法の記述的研究』, 1972, 秀英出版

c. 別の単語

「さがす」と「みいだす」などがこの例となる。

これらは、おなじ現象のふたつの段階というよりも、ひきつづいておこるふたつの現象であり、厳密な意味でアスペクトと呼ぶことはできない。

しかし、兩者のないだをゆれ、兩者をつなぐものとして「みつける」があり、「さがす」に接尾的要素をつけた「さがしだす」は「みいだす」とおなじ結果のグループにはいる、など、言語的な面でも、これらを一括する根拠がないわけでもない。(宮島氏 1972. p.683)

(4)「た」の機能を調べるために検討する(出来事)。

①(ねる)；「ねる」・「さめる」⁷⁾

②(ふる)；「ふる」・「やむ」または「あがる」または「はれる」

③(もえる)；「もえる」・「きえる」

④(うごく)；「うごく」・「とまる」

④には(はしる)；「はしる」・「とまる」, (あるく)；「あるく」・「とまる」, (すべる)；「すべる」・「とまる」, (あがる)；「あがる」・「とまる」, (まわる)；「まわる」・「とまる」等何らかのし方で動いていたものが「とまる」というかたちで終る(出来事)が全て含まれている。

④では「とまる」は全てに共通であり、前項の(出来事)も全て「うごく」という「出来事」としてとらえられるという共通の性質をもっているのでこれら(うごく)という(出来事)を表わす動詞を「うごき動詞」と名付け、以下そう呼ぶこととする。

「うごき動詞」の特徴のひとつは(出来事)のある段階から(とまる)という(出来事)が本来の「うごき動詞」が表わす(出来事)と過程の中で同時進行するもののように言語的にはとらえられるという点にある。

④にはこれらの「うごき動詞」が表わす(出来事)を代表させる意味で(うごく)ひとつを記したのである。

①より④までの動詞を特に別にあつかった分類というものはまだない。したがってこれらの動詞が金田一氏(1950)⁸⁾ 以来の動詞分類の中にこれらにふさわしい項目を見出すことはできない。しかし本稿の目的は、これらの(出来事)の表現の中に現われる「た」の機能の解明にあるのであって、動詞分類にあるのではないから、分類についてはこれ以上ここでは、ふれることをしないがこれらをひとつのグループとしあつかうことも、大變興味深い問題のひとつであると思われる。

①より④までにあらわれる動詞は従来分類に従えば全て「繼續動詞」と「瞬間動詞」に屬する動詞であるが、それを知っただけでは本稿が目的とする一連の(出来事)を表わす動詞類の性格の解明にはあまり役に立たないことは言うまでもない。

(5)(ねる)；「ねる」・「さめる」の進み方の表現について。

(出来事)としてはここでは(睡眠する)という内容である。語いの面では「ねむる」というものもあるが、「ねる」と、意味の全体を比較するとちがいがあがる(睡眠する)という(出来事)に則した意味で使われる「ねる」と「ねむる」はほぼ同じにあつかってよいと思われるので、ここでは動詞として「ねる」の方をとった。

7.) (出来事)としては(ねる)ひとつだが動詞としては「ねる」「さめる」のふたつであるという意味である。

8.) 金田一春彦氏「國語動詞の一分類」, 1950, 『日本語動詞のアスペクト』所収, 1976, むぎ書房。

8 渡邊了好

(ねる)という(出来事)は(ねむくなり), (ねいり), もう一度(ねむりからさめる)までの一連の過程であることはいうまでもない。

また「ねる」という動詞は韓国語の「자다」という動詞との対比の上でその特徴が明らかになる動詞のひとつでもある。

圖式によって(ねる)の過程の表現を見ることにするがまず次のような圖を準備する。

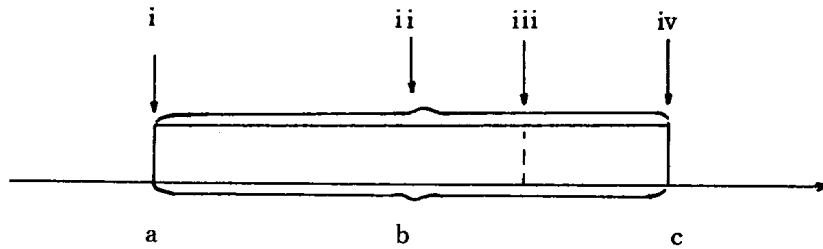


圖 6. (ねる)の過程

水平の矢印は時間のながれる方向を示し, a, b, cは, それぞれ(ねる)という(出来事)がはじまる瞬間, (ねる)という(出来事)が進行している期間, (ねる)という(出来事)が終る瞬間を示している。

垂直の矢印は(出来事)が過程の中でそれぞれの段階にあることを表わす表現がどんなものであるかを示している。ここでは特にiiiの矢印が示す破線の意味について考えておく必要がある。

iiiの矢印が示すものは(出来事)の側からみれば, bの期間内のどこかで起こる進み方の変化である。どのような変化かという(出来事)が終りはじめたことを示すような変化である。

ただし(出来事)のすすみ方の上の変化であって(出来事)自体の内容が変化してほかの(出来事)となるわけではない。したがって, 同じように現場にいたあわせた発話者A, Bがいる場合, A, B共に同一の(出来事)がすすんでいることは認めても, このiiiの破線における(出来事)の変化を同じように認めるとはかぎらない。Aがiiiの破線が示す瞬間に(出来事)が変化しはじめたと主張しても, Bはこれを認めない場合がじゅうぶんにありうる。

いまみてきたことを, 今度は, 日本語の表現の側から見るとどうなるであろうか。

iiiの破線の示す点は(出来事)が, 今までとはちがう動詞(ここでは「さめる」)によって表わせるような変化をしたと言語的にとらえられている点である。つまり言語的には他の出来事が起ったようにとらえられているといってもよいのである。

しかし, (ねる)という出来事が終わったわけではない状態である。言語的には「ねる」という「出来事」も進みつつあると考えねばならない。言語的には「さめる」という出来事は「ねる」という出来事のある段階でのあらわれ方であると考えられる。つまり「さめる」という出来事は「ねる」という出来事にその一部として含まれていると考えるべきであろう。逆に言えば「ねる」という出来事はその内部に「さめる」という「出来事」を含んでいるのである。

次にはiよりivまでの矢印に(出来事)の進み方を現場にいたあわせた発話者の表現としてふさわしい形式を記入することにする。

i: ここは(ねる)という(出来事)が実際に起ったその瞬間であり, 日本語では「ネタ」という他にないところである。

- ii : ここは発話者の前で誰かが眠りに落ちて現に眠っているところであるから、「ネテイル」という他には表現がないと言えよう。
- iii : (ねる) という(出来事)に變化が生じた瞬間である。それも(ねる) という(出来事)が終りそうな徴候を見せた瞬間である。これを現実描寫力をもって表現するには「さめる」に「はじめる」を組み合わせ、「サメハジメタ」とすることができる。
- iv : (ねる) という(出来事)が終った瞬間である。これは「サメタ」と言うより他にないであろう。ここで圖2(つくる)の例でのごとく「ねる」に「おえる」をつけて「ネオエタ」とするのは非常に不自然である。また「しまう」をつけて「ネテシマツタ」とするとこれは iv の瞬間に用いる形式でなく i の瞬間での表現となる。

次に「ねる」という動詞の性格を際立たせるために韓国語の動詞「자다」との若干の對照を試みておくこととする。

當然のことながら(자다) という(出来事)は共通のものとするのであるから圖6の圖式はそのまま使用できるものとする。

韓国語では、今起きぬけという顔の者に「ねていたのか」という意味で「자셨습니까」と言うことがある。また、「十分に寝たか」という意味で、「다 자셨습니까」と言うことがある。これらは全て iv の瞬間以降の(出来事)の現場にいる発話者の表現と言える。

一方、「12시에 자셨습니까」などというときは、i の(出来事)の始りの方の表現であると言える。

しかし i の瞬間を動詞だけの力で表わそうとすれば、「잠이 들었다」のように言わねばならないだろう。

日本語「ねる」と韓国語「자다」についての比較を総合すると日本語「ねる」は(出来事)の終りの部分を描寫するのに他の語いを借りなければならないというところに特徴があると言える。

次に以上の分析の結果を圖式6に記入して圖式を完成することとする。



圖7. (ねる)の過程とその表現

したがって、(ねる) ; 「ねる」・「さめる」という(出来事)を記述するにあたっての「た」の機能は(出来事)の始めと終り、それに(出来事)の進行状態の變り目を現実描寫力をもって表現することだと言える。

(6) (ふる) ; 「ふる」・「やむ」または「あがる」または「はれる」の過程の進み方の表現について。ここでの(ふる)は言うまでもなく、雨または雪等が(ふる)という(出来事)である。

雨であれ雪であれその他のものであれ空から降るものの場合どれも(出来事)としてはほぼ同様であるから、ここでは雨が(ふる)という(出来事)について検討することとする。

前の例と同様完成すべき圖式を次に圖8として提示する。

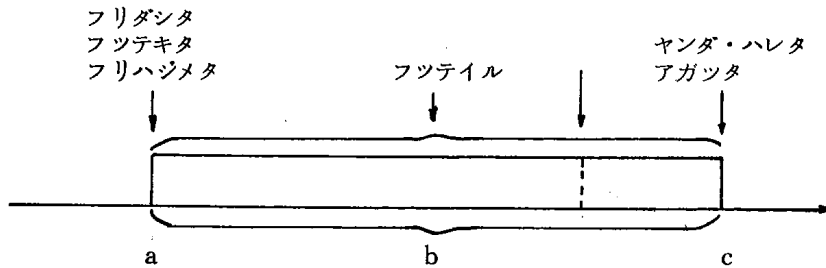


圖 8. (ふる) の過程とその表現

雨が(ふる)という(出来事)は、發話者が雨の最初のひとつぶを発見したときから始まり(この瞬間がaである)、継続的に雨のつぶが落ち続けている段階(この段階がbの期間である)を経て、もはや空から雨のつぶが落ちてこない状態になったとき(これがcである)までの過程である。

圖8においてはaに「フリハジメタ」を「フツテキタ」と「フリダシタ」bに「フツテイル」、cに「ヤンダ」を既知のものとして記入しておいた。これらは前稿を含むこれまでの考察によって明らかになった表現形式である。ただaの「フツテキタ」と「フリダシタ」が初めてあらわれたがこれらはやはり「フル」をもとにしてつくられる複合動詞のひとつである。

本稿の本来の目的は(出来事)における破線の瞬間を現實描寫力をもって表現できるような表現形式を見出すことにあるが、次に直接そこに到る前に、この(ふる)という(出来事)の(出来事)としての特徴にふれておくことにする。

まずaの瞬間の性格についてである。

雨が(ふりはじめる)ということは、必ずしも止まっていた機械が動き出す瞬間のように、その瞬間aというものを考えにくいものであることをまず考えねばならない。圖8の説明においては、このaについて雨の最初のひとつぶを発見したときというように表現をしたが實のところ雨の最初のひとつぶなどというものを考えるのは不可能であろう。これはもちろん發話者にとっての最初のひとつぶという意味ではあるにしても(ふる)という(出来事)の始まり(a)というものは瞬間としては考えにくいものだというのである。瞬間というよりはある幅を持った境界であると考えなければならない性質のものである。そして言語的にはこの境界を通過したととらえられたとき「フリハジメタ」「フツテキタ」(ときには「フリダシタ」)などと言ってこの(出来事)の進み方を示すのである。

次にはbの期間、これは「フツテイル」で問題はない。

cについては、aについて述べたと同様のことが考えられる。もはや雨のつぶが落ちてこない状態になったときというのも、さきに述べた始まり同様、瞬間としてはとらえがたくある程度の幅をもつ境界と考えざるを得ない。そして言語的にはやはりこの境界cを通過したとき「ヤンダ」という表現をするのである。

次に本題にもどって破線の段階の表現方法について考える。

cに「ヤンダ」あるいは「アガッタ」、「ハレタ」が現われるということはbの期間のどの部分からであれ(ふる)という(出来事)になんらかの變化が起った瞬間があると言わねばならない。言語的には「やむ」「あがる」「はれる」に「～はじめる」を合わせた複合動詞によってとらえられる變化ということになろう。現場にいあわせた發話者の表現ということ考えると「アガリハジメタ」または「ハレハジメタ」ということになる。「ヤミハジメタ」は不自然な表現である。前の二動詞で「ハジメル」との複

合動詞による表現が可能なのに「やむ」においてこれが不自然なのは、「あがる」「はれる」が次に起る出来事を示す積極的な意味を有するのに対して、「やむ」は本来「止まる」という「ふる」を否定するだけの消極的な意味しか有していないということと関係があると思われる。

次に現実の(出来事)の描寫表現の見地からの韓国語表現との対照について簡単にふれておく。

aの段階で韓国語では「비 온다!」と言うことがある。しかし日本語では、「アツアメダ」と言うことはあっても「アメガフル」と言うことはなく、「アメガフリダシタ」または「アメガフツテキタ」となる。

最後に(ふる)の圖式を完成することにする。

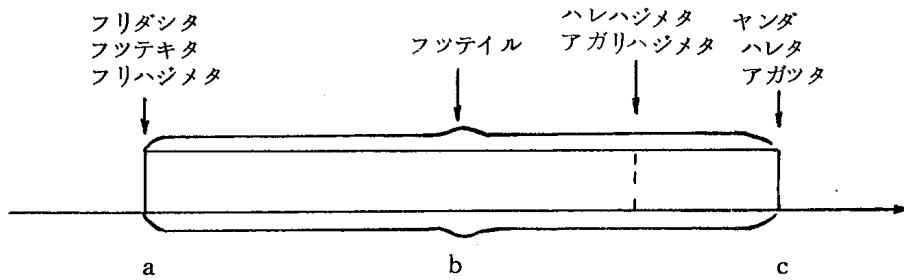


圖 9. (ふる)の過程とその表現

(7)(もえる); 「もえる」・「きえる」

この(出来事)についてはすでに(3)においてふれているので(圖5参照)それを補う形で述べることとする。

まず圖5のiiの矢印に記入すべき表現形式を見出すことから始めよう。(もえる)という(出来事)が終るといふ變化を起したといふ過程の進み方を示す形式ということになる。これは「キエハジメタ」ということになるであろう。

次に韓国語との対照を一言だけ述べることにする。注目すべきことは韓国語の動詞「타다」において「타다」はcの段階をつまり「타다」という(出来事)の終りの段階の表現に使うことができるのに対して、「モエタ」は單獨ではcの段階にある(出来事)を示すことはできないということである。cを示そうとすれば「ゼンプモエタ」とか「モウモエタ」とかしなければならぬ。それらの副詞を使用しない「モエタ」は始まりの段階の表現になってしまうことはさきに述べた通りである。

次に圖5を完成圖10とする。

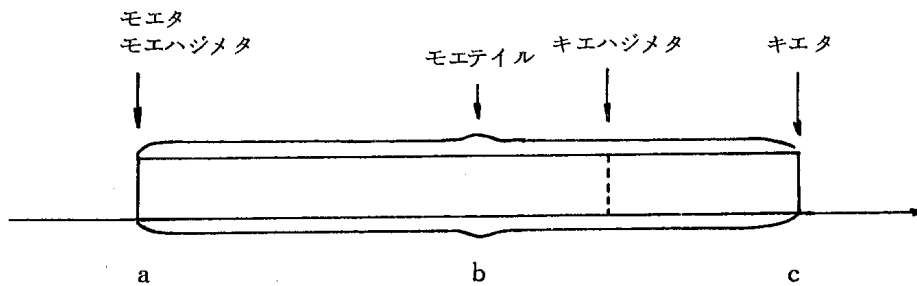


圖 10 (もえる)の過程とその表現

(8)(うごく); 「うごく」・「とまる」の過程の進み方の表現について。

本稿の目的は(出来事)の表現の中での「た」の役割を明らかにすることであるがその過程でひとつ

の興味深い事実を見出すこととなった。それは日本語の動詞の中に「うごき動詞」と名付くべき一群の動詞があるということである。

「うごき動詞」とは、その動詞の表わす（出来事）の終りの部分を描寫表現するのに、「トマツタ」という形式を用いる動詞のことである。具体的には、(4)の④に関連してあげた例のように、「はしる」、「あるく」、「すべる」、「おちる」、「あがる」、「まわる」等がある。

これらの動詞はすべて發話者がいあわせた場で起った空間的な運動や移動を表わすものである。しかし空間的な運動や移動を表わす動詞がすべて「うごき動詞」なのではない。

たとえば、「すわる」というような動詞は空間の中の運動ではあるが、その（出来事）の終りの段階の表現が「スワツタ」であって「トマツタ」ではないから「うごき動詞」ではない。

このように「うごき動詞」は(5)から(7)までに検討してきた動詞とおなじく（出来事）の現實描寫という観点から見るときその表現形式の中に語い的には別の語を含んでいる動詞である。

次に「うごき動詞」の示す（出来事）の中から（あるく）と（まわる）を例にとって、（出来事）のすすみ方の表現について調べることにする。

（あるく）のすすみ方の表現。

これは言うまでもなく立っている人間の足をつかっている運動であり移動でもある。(5)より(7)までの検討の結果によっても明らかなように圖式の a（始まり）を表わすのは「アルキハジメタ」であり、b（進行中）は「アルイテイル」、c（終り）は「トマツタ」となる。さらに（出来事）の始めが「あるく」で終りが「とまる」であるからその中間に（出来事）の變化をとらえた表現が考えられるということであった。

（あるく）にあつては「トマリハジメタ」という表現がありうるが、この段階については、他の語いを使って「オソクナツタ」とか「オソクナリダシタ」とか「ソクドガオチタ」とかの表現で變化を表わすのが普通であろう。これは「とまる」という動詞の性格によるものである。次に以上を整理して圖式を完成する。

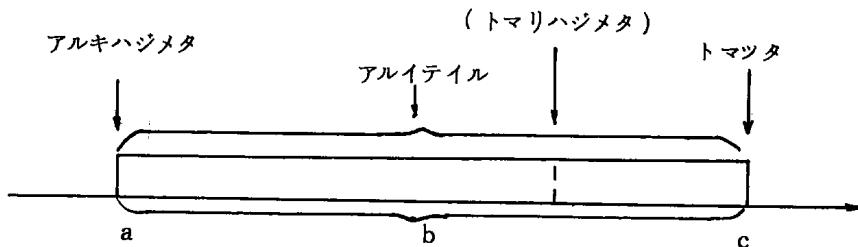


圖 11（あるく）の過程とその表現

（まわる）のすすみ方の表現

これはプロペラの回轉や時計の針の動きなどにみられる運動であり移動でもある。（あるく）と同様に必要な部分を整理していくと、aは「マワリハジメタ」、bは「マワッテイル」、cは「トマツタ」であり、「トマツタ」に到る變化に對する「トマリハジメタ」の表現としての不自然さは（あるく）におけるそれと同様である。次に圖式を完成する。

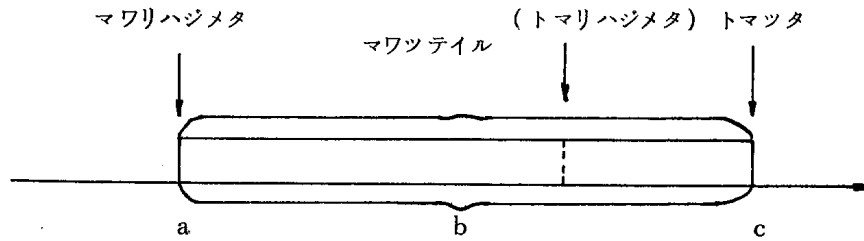


圖 12 (まわる)の過程とその表現

次に「うごき動詞」によって表わされる(出来事)に共通する過程の表現を次に圖式として整理しておくことにする。

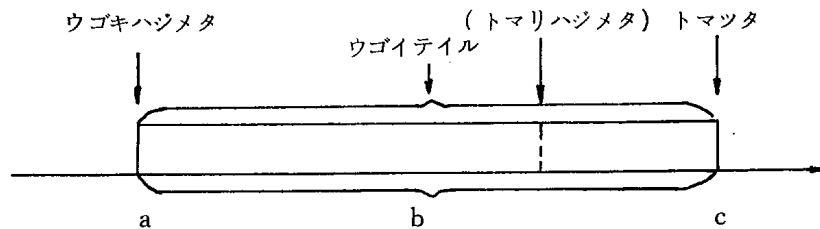


圖 13 (うごく)の過程とその表現

「うごき動詞」にあっては(出来事)の變化の瞬間を表現する形式が「うごく」「とまる」以外の語を用いることが多い(例えば、「オソクナツタ」「オソクナリダシタ」)。これは終りの段階を表現する「とまる」という動詞の性格によるためである。「とまる」は(うごき)の中斷や終了を示すのに用いられるが、意味の上で「トマツタ」段階のごく近いところだけを表わすようになってきているということであろうと思われる。

Ⅳ. まとめ

本稿は、外国人に対する日本語教育の見地から、ひとつの(出来事)が複数の動詞によって表わされる場合の「た」の役割を明らかにすべく考察をおこなってきた。その結果、

- (1) 複数の(本稿では二つの場合だけ)動詞が、ひとつの(出来事)を表わすのに用いられるときには、意味の上で役割の分擔があり、一方は(出来事)全体の統一的な意味と、(出来事)の進み方の始まりから進行中の段階を表わす。もう一方はその(出来事)の進み方の中で終りの段階だけを表わす。
- (2) 動詞A・BがABの順序でひとつの(出来事)を表わすとき(出来事)の進み方の段階の中で、終りの段階を分擔するBが使えるようになる瞬間を、「キエハジメタ」のように言語的に動詞Bを使つてとらえられる(出来事)があり、「うごき動詞」によって表現される(出来事)のようにこれを動詞Bを使つて十分に表わせないものがある。これは(出来事)の過程の進行上のある變化が言語的にとらえられているものといないものがあるということである。
- (3) (出来事)の進み方の上のある變化が言語的にとらえられるときには必ずそこに「た」が用いられる。
- (4) ひとつの(出来事)が複数の動詞によって表わされる場合の表現を検討する過程で共通の性格をも

14 渡邊了好

つ一連の動詞を見い出した。「うごく」によって代表され「うごき動詞」と名付けられる動詞で、(出来事)の終りの段階を表わすのに「とまる」という共通の動詞を用いるという特徴を持っている。

(5)「うごき動詞」によって表わされる(出来事)では、繼續していたその(出来事)が終ろうとする變化を「とまる」を使っては表わさないのが普通である。

以上のような結論を得た。

参 考 文 献

- 金田一春彦(1950)「國語動詞の一分類」(金田一, 1976 所收)
金田一春彦(1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」(金田一, 1976 所收)
高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」(金田一, 1976 所收)
板坂元(1971)『日本人の論理構造』
寺村秀夫(1971)「“た”の意味と機能」(『論集日本語研究7』所收)
鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』
宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』
寺村秀夫(1973)「テンス・アスペクト・ボイス」(『日本語と日本語教育, 文法編』所收)
吉川武時(1973)「現代日本語の動詞のアスペクトの研究」(金田一, 1976 所收)
金田一春彦(1976)『日本語動詞のアスペクト』
國廣哲彌(1976)『構造的意味論』
橋本萬太郎(1981)『現代博言學』
國廣哲彌(1982)「テンス・アスペクト(日本語・英語)」(『講座日本語學』11 卷所收)
寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』
吉川武時(1982)「日本語教育におけるテンス・アスペクトのあつかい」(『日本語學』1982, 12 月號)